修学レポート

上智大学 鈴木崇之

～私がタイで経験したこと～

1、大学生活

私はタイの国立大学である、タマサート大学に約半年間交換留学をしていました。2つのキャンパスがあり、私はバンコク中心地からやや西、チャオプラヤ川東岸に立地しており、大学のすぐ裏にはきらびやかな王宮や多くのマーケットが立ち並ぶタープラチャンキャンパスに通っていました。（写真右）このキャンパスだけでも全17学部、約20のプログラムがあり、その中の9割が英語で授業が行われており、さらに欧米やアジアからの留学生の割合もおよそ1割を占めるグローバル総合大学です。王宮が近いこともあり、大学からは多くの政治家や官僚が排出されることでも有名です。タイ政治の影響を大きく受けるため、付近で定期的に行われる王宮に祭わるイベントでは、大学が会場になることも多く（写真左：学内にある国王の巨大絵）、私も多くのイベントに参加することができました。11月中旬に起こった国王のスキャンダル騒動により試験期間が前倒しされ、教授が試験範囲を終わらせようと躍起になっていたことも印象的です。また、帰国直前の12月にはTED Talkとタマサート大学のコラボ企画があり、面接を突破した私はステージにて、タイと日本のジェンダー論についても優秀な現地学生と討論しました。

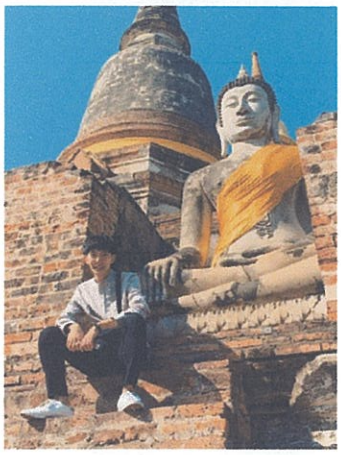
2、クラブ活動

大学には学部対抗のサッカーやバスケットボール、バレーボールのチームがあり、希望者は自身で加入し年に2回学部トーナメント戦を行い賑わっていました。私は、他学部のサッカーとバスケットボールチームに所属していました。サッカーでは準決勝まで進むことができ、サッカー経験の全くない私もチームに貢献することができました。試合

後は深夜まで大学の川辺に残ってみんなでお酒を飲んだことを今でも覚えています。バスケットボールでは、大学の体育館が工事中だったこともあり試合はできませんでしたが、みんなで練習をして汗を流したことは良い思い出です。

3、旅行

大学での勉強が忙しかったこともあり、私は滞在中にタイ以外の国への旅行は行けませんでした。しかし、滞在中にできた多くのタイ人友達から誘いを受け、バンコク市内のいわゆるガイドブックには載っていないローカル地域や歴史遺産で有名なアユタヤ（写真左：自分）やチェンマイ、ビーチで有名なパタヤやクラビーなど本当にたくさんの場所へ連れて行ってくれました。プライベートをタイ人の友達と過ごす中で、タイ語が自然と耳に入ってくるようになり、会話も追いつけるようになりました。座学でタイ語を学ぼうとするのではなく、このように友達と直接ふれあい心を通わせることで、無理なく楽しくタイ語が身についていったのかなと思います。帰国間近には両親も来てくれ、カンチャナブリなどにも行きました。全滞在期間を通し、タイ中を満喫できたと感じています。



～それら体験を踏まえて感じたこと～

① 語学について

結論から述べると、私は英語とタイ語（写真右：街中に見られるタイ語）、どちらも読み書き会話に不自由なく操れるにまで上達しました。タイ語は授業をとっていたのでしっかりと勉強し、習ったことをプライベートでタイの友人に対して使い、その友達から発音や使い方の指導を受けてもらっていました。また流れている音楽や飛び交っている言語は基本的にタイ語なので、触れる機会が多かった分上達スピードは早かったと感じています。英語は、講義をしっかり受けることはもちろんのこと、講義内で積極的に発言しとにかく話す機会を増やそうと努力していました。自宅ではタイ語ではなく、英語の洋楽やドラマを視聴するようにし、日本語をできる限り封じ込むことによって上達を図っていました。

留学を通して、日本の英語教育の課題も見えてきました。読み書きだけでは正直英語の上達には限界があります。私も完璧に話せるようになったわけではないですが、できるだけ話す機会を増やし、文法や単語に縛られることなく自分で"言葉で遊べる"ようにまでにならないと真の習得は叶わないと痛感しました。

② タイの国民性について

タイは微笑みの国と称されることもあり、やはり根本的な"人の優しさ"というのは強く感じました。どこにいても、タイ人が観光客などで困っている人を積極的に助けている様子が見受けられました。中でもタイの人間関係に私は感銘を受けました。例えば日本では、友達と遊ぶ約束をしさらに自分の知り合いをそこに呼びたいときは必ず最初に約束した人に、知り合いを呼んでいいかの許可を取る必要があると思います。タイではこのような許可制度は一切必要ありません。自分が遊びたい人は誰であろうが誘って良く、そこに面倒な人間関係は存在しません。そのためタイでは2人きりで遊ぶということがあまりなく、2人だと思っていざ集まったら10人ぐらいに膨らんでおり、自分だけではなくその友達同士も初めましてということだって頻繁にありました。私はこのようなタイの寛容な精神は本当に好きで、自分に合っているな、タイに永住してもいいなと思えるほどでした。日本の人間関係、上下関係はかなりタイトで、スーツをきて毎日辛そうに通勤する姿はタイにはありませんでした。

～最後に～

留学を経験するとある程度母国を客観視できるようになると思います。その国と母国をどうしても比較し、ホームシックになるひともいれば逆にこの国に住みたいと強く望むほど価値観に変化が生まれる人もいるでしょう。私は圧倒的に後者でした。タイ人の温かさは今でも印象に残っています。それは観光客として短期間ではなく、留学生として長くいたからそこ思えたことです。帰国後のいま日本での生活に戻り、どこかタイに再び行きたいと思っている自分がいます。それほどまで私はこの国を理解でき、良いことも嫌なことも様々な経験を経た上で思えることだと感じます。4月から入社ですが、タイ駐在のリクエストを今後も出し続けいつかまたタイに戻りたいと思っています。

このような機会を私に与えてくださった両親や大学、応援してくれた友達そして、金銭面で大きくサポートしてくださったこの埼玉発奨学金制度に私は感謝しても仕切れません。学生生活最後の一年の半分を、留学というかけがえのないものに費やすことができ、心から良かったと感じています。本当にありがとうございました。留学を通して私のような経験を1人でも多くできる若者が今後もこの埼玉から出てくることを願って、私からの修学報告とさせて頂きます。改めてありがとうございました。